

# 經濟論叢

第166卷 第5・6号

---

信用の経済学	古川 顕	1
正義と寛大：商業との関連で	田中 秀夫	36
二輪産業の国際競争関係と アメリカン・ホンダ・モーターの設立	太田原 準	53
企業内訓練、調整コスト及び雇用調整(1)	高畑 雄嗣	74
K. W. カップの社会的費用論； その認識論的側面	山根 卓二	93
台湾における産業構造の変化と 中小企業の対応	高 杏華	109
中国の自動車流通システムの変遷過程(1)	劉 芳	131

經濟論叢 第165卷・第166卷 総目録

---

平成12年11・12月

京 都 大 学 経 済 学 会

## K. W. カップの社会的費用論；その認識論的側面

山 根 卓 二

### I はじめに

本稿では、環境経済学上の重要な概念の一つである K. W. カップの「社会的費用 (social costs)」の認識論的側面に注目する。これまでカップの社会的費用論に関して盛んに議論されてきたのは、社会的費用の定義それ自体の内容についてであったが、本稿では、社会的費用を定義することの意義に焦点が当たることになる。カップは、自然科学的知見に基づいて社会的費用を定義することが現実の社会的費用の正確な認識を導くと論じた。彼によれば、われわれは何らかの概念を背景に持ちながら現象を観察している。

社会的費用の定義も観察や経験を導くための概念である。しかしもう一方で、概念は架空の想像物ではなく、経験的な現象を基礎にして構築されるものである。社会的費用はこのような概念と経験の循環過程によって次第に明確に認識されるようになるのである<sup>1)</sup>。なお、以下本稿で扱う「概念 (concept)」および「概念枠 (conceptual framework)」という用語は、定義、理論、モデルなど、現実を抽象化するための言語的道具といった広い意味で用いられる。社会的費用の内容は自然科学的知見に大きく依存するが、社会的費用の認識の発展はただ単に自然科学の進歩に規定されるのではない。社会的費用の認識は自然科学の理論をもとに、経験的調査 (empirical exploration) を行うことにより発展する<sup>2)</sup>。経験的調査とは実験室の中で行われるものではなく、現地に赴い

1) カップ [1975] 87-88ページ。Kapp [1969] p. 334.

2) カップ [1975] 96-97ページおよび101ページ。

て実際の影響を確かめることである。水俣病にしてもオゾン層の破壊にしても自然科学の理論があるだけでは認識できなかった。それらは、理論という概念に基づいた経験的調査によってはじめて認識され、そのことがさらに政策的意思決定の契機となったのである。

このような社会的費用の認識過程を主流派経済学は考慮してこなかった。A. C. ピグーをはじめとする、市場を信頼する主流派経済学の社会的費用論(いわゆる外部不経済の理論)においては、「経済主体の経済計算においては何も顧慮されていない費用」を単に課税などを通じてその経済主体に払わせるようにすれば、社会的費用は市場を通じて削減される、と説明される。カッパはこれに反し、社会的費用は単純に市場を通じては削減されないと主張する。これまで、このカッパの主張は繰り返し紹介されてきたが、なぜ市場では駄目なのかについての認識論的かつ論理(学)的な説明がなされてこなかった。そしてさらには、この問題がカッパの提唱する「諸科学の統合」の議論といかなる関連をもつのかについてもほとんど取り上げられたことがない。それは、カッパが科学哲学・社会学・社会心理学などに深く通じていたことが見逃されてきたからであろう。

国内においてカッパの社会的費用論が取り上げられるのは、主に価値論からみた、彼による社会的費用の定義の妥当性についてである。カッパは社会的費用を「経済活動によって引き起こされ、第三者が蒙る損失、あるいは全体としての社会に転嫁される費用で、それを引き起こす経済主体の経済計算においては何の顧慮もされていない費用」<sup>3)</sup>と定義した。これに対し、宮本 [1976]、[1989] は、定義の内容には同意するものの、カッパの社会的費用概念には、実体的な損失とそれに起因して発生する貨幣的諸費用とが区別されず、また、貨幣的にはかることもできず修復もできない絶対的な損失があることが触れられていないと指摘する。さらに寺西 [1983]、[1984] は、カッパも宮本も損失を使用価値概念で捉えていないと指摘し、さらに損失を対象・程度・質・潜伏

3) Kapp [1963] pp. 13-14.

期間などにより細かく分類している。これらの議論自体は有益で反論の余地がない。だがそれらの議論にしても、社会的費用や社会的損失の内容が具体的に何であるのかについて最初から分かっていたということを前提としており、それらが認識されていく過程については不問のままである。

これとは別に植田 [1996] は、カップが環境問題に関する認識の発展の過程についても議論を展開し、自然科学的知見による社会的費用の認識の共有化が重要であると主張したことに触れている<sup>4)</sup>。本稿も、この「認識の発展と共有化」に焦点を当てて主流派経済学の社会的費用論を批判しつつ、カップと同様に諸科学の統合を主張し、さらには環境に悪影響を与える人間の活動を社会的にチェックする制度の必要性について論じたい。以下では、その議論が彼の抱く哲学的人間観（それは科学哲学・社会学・社会心理学などから多大な影響を受けている）に沿って進められる。

## II 社会的費用の認識

これまで国内で展開されてきた社会的費用論は、発生原因や負担関係が確実に認識された社会的費用や社会的損失に関するものであった。そこで問題になっていたのは、既に一般に認識されている具体的な社会的費用や社会的損失をどう分類するかであり、その分類法について論争が交わされてきたのである。これは社会的費用についての静態的な議論であるが、有意義な議論でありその価値を否定すべきではない。

しかし、カップは社会的費用を静態的にだけでなく動態的にも捉えていたのである。カップのこの側面は、彼への制度派経済学の影響に起因しているが、制度派経済学が正しく理解されていないせいか、国内でこの側面が論じられることはほとんどない。けれども、この側面を強調したからといってこれまでのカップ解釈が否定されることは全くない。

ところで、そもそも動態的な視点がなぜ必要かといえば、未だ一般に認識さ

4) 植田 [1996] 21ページおよび31-32ページ。

れていない新しいタイプの社会的費用が現在われわれの体を蝕み始めているかもしれないし、そのような社会的費用の発生原因や負担関係を短期的に把握することは困難だからである。具体的な諸々の社会的費用が即時的にとらえられるのは交通事故や労働災害のようなものぐらいであろう。特に地球規模の環境問題においては、広範囲の領域を全体的に捉えなければならないため、発生原因や負担関係を確定するのは困難である。これに関連して高橋 [1993] は、フロンがオゾン層を破壊することが公認されるようになる過程を例にして、社会的費用認識の特徴をいくつか挙げている。第一に、環境問題は全体として捉えられなければならない。「フロンがオゾン層を破壊するという化学の知識があっただけでは駄目で、少なくとも、それが大気圏に放出されて成層圏に達するという物質移動のルートと結びつけなければならない。」<sup>5)</sup> 実験室の論理だけでは環境問題を捉えることができず、経験的調査が必要となる。第二に、環境に影響がでてそれを確認することが難しく、さらに原因と結果を結びつけることも難しい。学者によって環境への影響の有無やその原因についての意見が食い違うことが多々ある。

これらの特徴は、われわれが世界の全体を直接知ることができないということに起因している。われわれは世界全体を見渡すことができないし、現実世界から「社会的費用そのもの」を切り取って目の前にとりだして見ることもできない。それに、そもそも社会的費用を直接丸ごと知覚してしまったらそのときはもう手遅れである。社会的費用は、直接知ることができるのではなく、いくつかの兆候的現象を既存の理論の俎上にのせ、因果連鎖に関する推論を繰り返すことによって間接的に把握されるのである。

以上のような事情を、カッパが『社会的人間の科学へ向けて』(Kapp [1961])で描いた人間観をふまえながらより詳しく論じていくことにしよう。

5) 高橋 [1993] 20ページ。

### III 概念枠を通して世界を見る人間

カップは、人間には、物理法則に従う物体としての無機的 (inorganic) 側面、調節機能を持つ生きた生命体としての有機的 (organic) 側面、そして文化や社会の中で相互作用を行う主体としての社会的 (social) 側面の三側面が存在することを強調し、これらの側面は互いに密接に関連しているけれども単一のシステムに還元して説明することができないと主張する<sup>6)</sup>。「無機的物質、生きている有機体、そして人間社会は、一方では内在的に互いに関連しあっているが、それでもなお、それらは本質的に異なる特定の組織レベルとしてみなされねばならない。これらの構造は、進化的意味において、そして社会的側面が他の二つを含んでいるという点で (有機的側面は無機的側面を『包んでいる』)、連続していながらも、それと同時に、各々は質的な違いをあらわし違った複雑性の度合いによって特徴づけられる。』<sup>7)</sup> この違いがあるにもかかわらず、これまで有機体レベルや社会レベルの領域においてもマクロレベルの力学アナロジーが無批判に採用されることが多かったと彼はいう<sup>8)</sup>。

これら三側面のなかでも、カップは特に人間の社会的側面を強調する。他の二側面が刺激—反応 (stimuli-response) 過程であるのに対して、社会的側面はそうではない。しかし主流派経済学は社会を刺激—反応過程によって記述する。例えば、汚染物質を引き起こす財を生産しピグー税をかけられている企業の利潤最大化問題を、刺激—反応過程として図式化すると以下のようなになるだろう。

この図式において、企業は利潤を最大にする生産量で均衡 (平衡) 状態にある。税という外からの刺激は均衡状態を乱すが、企業は利潤最大化問題を通じて自動的に (automatically) 最適な財の生産量を調整し、新しい均衡状態を確

6) 同様の主張はベルタランフィ [1973] を参照。

7) Kapp [1961] p. 75.

8) Kapp [1961] p. 77.

立する<sup>9)</sup>。確かに無機的存在・有機的存在としての人間はこのように反応するだろう。例えば、走ってきた車に接触すると、物理法則に従う無機的存在としての人間は跳ね飛ばされて地面に倒れ、有機的存在としての人間は出血するとすぐさまそこを修復しようとする。しかし社会的存在としての人間は与えられた刺激に対して自動的に反応するのではない。主流派経済学における社会的費用論、いわゆる外部不経済の理論は、体中に入った有害物質が体に内在的に備わった自動調節機能によって処理されるのと同じように、社会的費用も政府が適切に介入すれば市場経済の内部で自動的に処理されると主張してきた。ここでは、政府が社会的費用を瞬時に知り尽くしてしまう能力を持ち、課税された企業がすぐさま社会的費用を処理する。しかし、有機的人間（あるいは素粒子のレベルでは無機的人間）は体内に入った有害物質をすぐさま感知し（直接知り）自動的に処理するけれども、社会的費用を社会的レベルで解消するためにはそれを社会的人間が認識していなければならない。この認識過程を抜きにして市場経済に社会的費用の解消を委ねても自動調節機能などはたらくはずがない。では、無機的・有機的レベルが社会的レベルと具体的にどう違うのかを見ていくことにしよう。

両者の違いは「知る」という意味の違いにある。無機的・有機的人間が「知っている」とは「感知している」ということであり、社会的人間が知っているとは「認識している」ということである。「認識する」という行為は言語と深い関わりがある。カッパは、E. カッシーラーの主張を引用しながら、人間が言語的シンボルを通して世界を把握する動物であることを強調する。「人間は、いわば自己を、その環境に適應させる新たな方法を発見した。あらゆる動物の種に見出されるはずの感受系と反応系の間、人間においては、シンボリック・システム（象徴系）として記述されうる第三の連関を見出すのである。……生物の反応と人間の反応の間には明白な差異がある。前者の場合には、外界の刺激に対して直接にして即時的な反応が与えられるのであるが、後者の場

9) ベルタランフィ [1971] 12-13ページ、参照。

合には反応は遅延される。それは徐々にして複雑な思考過程によって中断され遅延せしめられる。』<sup>10)</sup> 社会的存在としての人間は世界を直接見るのではなく、言語的な「概念枠 (conceptual framework)」を通して世界を見る。そして、単に過去や現在の刺激に直接反応するのではなく、未来の事態についての「予期像」という概念枠を通して間接的に反応するのである<sup>11)</sup>。

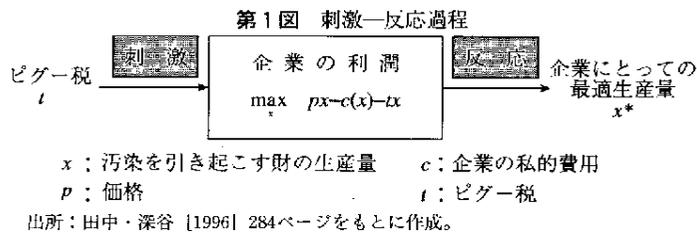
概念枠を通じて世界を見なければならぬのは、世界が無数の対象から成り立ちそれらの対象どうしの因果関係も複雑で、それを丸ごと感知することは不可能だからである。社会的費用にしてもこのことが当てはまる。先に見たように、環境を一挙に丸ごと捉えたり、実際に悪影響がでているのかどうかやその影響の原因を確定したりするのは非常に困難を極める。社会的費用を手にとって見ることでできる一個の負の財 (bads) であるかのように扱うモデルは実質的な問題解決にはつながらぬ。社会的費用はいくつかの兆候と過去の経験や理論を組み合わせて推論 (infer) することによって初めて、言い換えれば、シンボリックな概念枠を構成し、それを通して観察することによって初めて、社会的人間によって認識されるのである (もちろん無機的・有機的人間は社会的費用を被った瞬間にそれを感知するけれども)。

概念枠があるとわれわれは環境に柔軟 (flexible) に対応できる。社会的人間は、過去の経験をもとに概念枠を修正または拡張することによって、全く新しい状況にも適応できる。「新しい経験や新しい状況にそったニーズに対応するこの能力がなければ、人間は世界にうまく対処し生き残ることは望めないであろう。実際、どんな急激な新しい状況も人間をどうしようもない状態 (helplessness) にさらすであろう。』<sup>12)</sup> 新しい状況へ赴く度に所与の目的が用意されているわけではなく、目的はそのつど作り変えられなければならない。わ

10) カッシーラー [1997] 63-64ページ。Kapp [1961] p. 145. このような主張の萌芽はすでにカント [1961-1962] に見られる。カントは、人間は生物学的な必然の世界 (感性界: *Sinnenwelt*) と自然法則から解放された自由の世界 (悟性界: *Versandeswelt*) の両方に住んでいる、と主張した。

11) Knight [1933] p. 201. 高橋 [1988] 第三章。

12) Kapp [1961] p. 149.



第2図 言語的シンボルを操作しながら世界を見る主体



れわれが特定の刺激に反応するだけの生物であれば、光に反応して火の中に飛び込む虫のように取り返しのつかない失敗を犯すことになるであろう<sup>13)</sup>。

ところで、第1図における企業行動の記述が刺激—反応過程になってしまうのは、主体が言語的シンボルを用いて概念枠を構成する過程の説明が省かれているからである。企業を社会的人間として記述するためには、第1図の二つの矢印で挟まれた領域を、無機的・有機的な存在としての人間とみなすのではなく、社会的存在としての人間によって操作される概念枠とみなし、それがどのような認識過程を経て構成されまたどのように更新されていくのか、ということまで説明しなければならない。こういうわけで第1図は第2図のように書き換えられるべきである。

ここで、カップの議論を敷衍するために論理的な議論をしておきたい。人

13) とはいえ、人間の抽象的思考能力を千放して賞讃してはならないであろう。この能力こそが環境破壊の一翼を担ってきたからである。だが、これ以上の環境破壊を防ぐのもこの能力次第なのである。

間行動が刺激—反応過程として捉えられてしまう論理的な理由は、人間行動の全てを演繹過程として捉えがちなわれわれの研究態度にある。C. S. パースや F. P. ラムゼイによれば、演繹的推理 (deduction) は、与えられた知識の中から部分的な知識を抜き出す推理、もしくは与えられた知識を整合的に並べ替える推理である<sup>14)</sup> (第3図)。形式的な主流派経済学の議論においては、社会的費用 (外部不経済) が最初から既に与えられた知識として丸ごと認識されていて、それを形式的にいかんか処理するかを問題としている。演繹的推理は確かに人間の生存のためにも必要な推理であるのだが、それだけでは認識の発展には寄与しない。例えばピグー税を課税された、汚染物質を排出している企業の利潤最大化行動を非常に単純な推論形式で表すと以下のようなになる。

[規則]：いかなる場合も利潤を最大化する選択肢を選ぶ

[事例]：ピグー税を課せられると、「汚染物質を削減する」という選択肢が利潤を最大化するものとなる

ゆえに

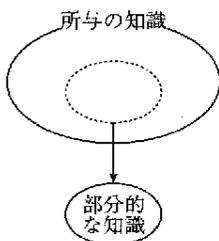
[結論]：ピグー税を課せられれば、「汚染物質を削減する」という選択肢を選ぶ

この推論形式においては何ら新しい知識が獲得されていない。[結論]は [規則]・[事例] という二つの前提の中に既に含まれていたものである。この企業は社会的費用を課税された瞬間に完全に認識するのである。

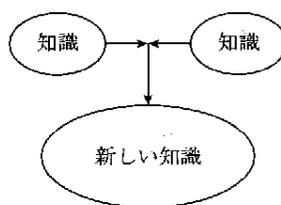
しかし既に述べたように、社会的費用は複雑な環境における相互依存関係を把握する努力がなされるにつれて漸く認識されるものである。これに関連して、カップは次のようにいう。「……現実的内容の全くない外部不経済のような用語を導入することによってこの〔主流派経済学の〕分析的枠組みとそこから引き出される理論的結論を救うことができると信ずれば、現に作用している相互

14) パース [1982] およびラムゼイ [1996] を参照。

第3図 演繹的推理



第4図 認識の発展



依存関係を経済理論が十分に組み入れてきたという誤った印象が生まれる。」<sup>15)</sup> ([ ] 内は引用者) 実際には、企業や政府は社会的費用の全貌をはっきり認識しているとは限らない。よって、与えられた認識のもとでの形式的な議論だけでは解決にはつながらない。とはいえ、本稿では市場原理そのものや演繹的推理そのものを批判しているわけではない。形がはっきりして既に公に認識された財についてはもちろん市場で処理できるであろう。しかし、全貌をつかむのが難しい社会的費用といったものがア・プリオリにモデルの中に組み込まれるのは、問題を解決するどころかかえって隠蔽することになる<sup>16)</sup>。

認識された社会的費用を処理する前に、その社会的費用を次第に認識していく過程がなければならない。それは第4図のように互いに包含関係にない知識どうしを結びつけて新しい知識を生み出す過程である<sup>17)</sup>。「因果関係の把握」というものは後者の作業の典型である。例えば、大気中に放出されたフロンガスがオゾン層にまで達している、という事実は、非常に単純化すれば次のような推論によって獲得されたであろう。

15) Kapp [1970] p. 842.

16) Kapp [1970] p. 842.

17) パース [1982] によれば、人間が行う推理には演繹 (deduction)・帰納 (induction)・仮説形成 (abduction) の三つがある。演繹は分析判断と呼ばれ、あとの二つは総合判断と呼ばれる。認識の進化に寄与するのは総合判断である。ラムゼイ [1996] も参照。クワイン [1992] のように分析判断と総合判断は明確に区別できないと主張する哲学者もいるが、いずれにせよ、演繹過程だけを重視するような人間像には欠陥がある。

[観察事実]：オゾン層が破壊されているという事実が観察されている

[理論]：フロンはオゾンを破壊する

ゆえに

[仮説]：大気中に放出されたフロンガスがオゾン層まで達しているのではないか

この推論形式においては、[観察事実] と [理論] の二つの知識から一つの [仮説] という新しい知識が生まれる。この新しい知識は、経験的調査（観察）を理論という概念枠を通して行うことによって初めて獲得されるのであって、実験室で得られた知識がすぐに社会的費用の認識になるのではない。社会的費用が政策的意思決定の契機となるのは、このような新しい知識を生む推論によってである。

容易に気づかれるように、オゾン層が破壊されているという事実を説明する仮説は上記の仮説以外にも論理的には無数に存在するであろう。これが演繹的推理と異なる点である。したがって、もしある一つの仮説が全くの偶然によって立てられるのであれば、各人各様の仮説ができ、その諸仮説は一代かぎりでは終わるであろう。そして一回一回の推論の場面はとてつもない不確実性に晒されるであろう。しかし実際には、われわれは概念枠という思考習慣を社会や文化という場において獲得しそれを共有しているので、その概念枠（理論）と経験的調査とから推論される仮説が無数に乱立するということはない（もちろん少数の仮説が競い合うことはありうるが）。知識というものは社会や文化の内部で蓄積・継承され更新されるのである。次の節では、カップの捉えた文化的人間像をみることにする。

#### IV 人間と文化、そして諸科学の統合

ここまで、人間は刺激にただ単に反応するのではなく、概念枠を通して世界をみてから行動すると主張してきた。しかし、その概念枠がどのように獲得さ

れるのかは説明していなかった。概念枠はたった一人の人間によって瞬時に構成されるのではない。カッパは概念枠が「文化化 (enculturation)」という過程を経て形成されるという。この文化化が人間の認識を発展させるのである。

カッパによれば、これまでの個人か社会のどちらかに還元して人間行動を説明するやり方では不十分である。「個人の存在、思考、行動は広範囲にわたって人工の(文化的な)環境に起因する。よって、社会—文化的環境から分離された個人の動機の見地から社会過程を理解する試みは、社会現象と人間社会の完全で正確な理解には導かない。同様に、文化は人の手によって創られた (man-made) ものものであると同時に個人に対して問題を引き起こす。それ故、個人の外部で起こる個人から独立した(そして個人にどんな効果も及ぼさない)純粋に客観的な制度化の過程として文化を解釈することは、社会過程の不完全で部分的で誤りを導きやすい理解を引き起こすだけである。」<sup>18)</sup> 生まれたばかりの未成熟な (immature) 人間は有機体の自動調節機能だけでは生きていけないので、家族やコミュニティーから学習やコミュニケーションを通じて概念枠を身につけなければならない。そのために、個人は生まれ落ちた文化的環境から多大な影響を受ける。これは社会過程と人間行動の客観的(社会的、制度的)要素である。しかし一方で、学んだ概念枠をいかなる経験の場面でも適用しようとするとは変化する現実に対応できず、どこかで齟齬を来す。よって、概念枠を更新できる独創的な個人がいなければならない。これは社会過程と人間行動の主観的(個人的、意志的)要素である<sup>19)</sup>。

カッパはこの人間と文化 (man and culture)、あるいは個人と社会という二つの要素は切り離してはいけないと主張するのである。この二つの要素が分離され、学習やコミュニケーションの過程が捨象されると、社会は第3図のような形で、与えられた知識を単に処理する原子論的個人の寄り集まりとして表現されてしまう。なぜなら、概念枠が所与でかつ固定されてしまうからである。

18) Kapp [1961] p. 131.

19) Kapp [1961] p. 130.

だが、生まれながらに完全な認識を持っていることはあり得ないし、誤った認識は新しい状況へ向けて正しいものに更新されなければならない。したがって、社会は第4図のような形で、個々人の認識が、言語的シンボルを用いた学習やコミュニケーション、そして概念枠の経験的調査への適用を通じて新しいものへ変わっていく過程として表現されなければならない。「人間のシンボリック・システム（象徴体系）とそれに関連した思考の過程は、全く新しい学習と知的成長の可能性を広げる。蓄積された知識や技術の共有プール（common pool）に個人の経験を加入させることによって、またこのプールを一つの世代から次の世代へ伝えることによって、学習の過程はまさに蓄積的になる。各人の世界は遺伝によって受け継いだものや直接経験することに限定されるのではなく、勤勉な学習過程で得られるものに依存する。……人間は、誕生時点で環境の破壊力を免れるのに適さない程のひ弱さを持っているにもかかわらず、生存にかかわる問題にうまく対処できるのはこの蓄積された知識と技術のプールのおかげである。」<sup>20)</sup>

経済学の形式的モデルは以上のような認識の発展の過程を捨象してきた。新古典派の社会的費用論（外部不経済の理論）は社会的費用の内容そのものについては自然科学に任せ、形式的な行動パターンのみを分析してきた。科学の専門分化（compartmentalization）が進むと、各々の専門分野は、前提（諸対象間の因果関係など）の正当性を問う作業を他の専門分野の責任とし、自分たちは普遍的な純粋形式を追求することに没頭してしまう傾向がある<sup>21)</sup>。それは所与の知識を形式的に処理するという一般的な人間像があり、研究者自身もそれに従おうとするからである。これに対しカップは、専門分化された諸科学のもとでは実質的な解決は望めないであろうと一貫して主張し、諸科学の統合を呼びかける。社会的費用は汚染源や物質どうしの因果関係、そして生活様式などが複雑に絡み合って発生する。この複雑な構造は共同体内の学習やコミュニ

20) Kapp [1961] 145-146.

21) Kapp [1961] chs. 1-3.

ケーションを通じて、しかも発展的にしか認識されないことを理解した上で、われわれ研究者自らも専門分野を越えて協力し、認識を発展させていくべきである。

さらに必要なことは、一般の人々にも自然科学的知見を普及させることである。いくら実験室の中だけで理論が発展しても社会的費用は認識されない。日常生活の中で何らかの環境への悪影響が生じていたとしても、そこで生活する人々が理論という概念枠を獲得していないのなら、その悪影響を認識することができないのである。以上のことから、幅広い分野が結集した専門家集団と一般の人々々が協力して社会的費用をチェックするような制度の構築が望まれる。協力とは、概念と経験が分離しないようにすることである。つまり、専門家が専ら概念を所有し現地の人だけが社会的費用を観察するようなことを避け、専門家と現地の人が概念枠を共有し、両者同行のもとで観察することである。

## V 総 括

本稿では、社会的費用の認識過程の重要性を指摘し、そもそもそれが社会的意思決定の契機となることを示した。その議論は K. W. カップの理論の背景にある哲学的な人間像に沿って進められた。人間は、たんに環境から刺激を受けて反応するだけの物体や生命体ではなく、概念枠という言語的シンボルを通して世界を把握する社会的な主体である。この概念枠は、共同体での学習やコミュニケーションの過程を通じて知識どうしが結びつけられることにより進化する。このような認識の発展過程は経済学の形式的なモデルでは扱うことができない。形式的な演繹モデルは所与の知識を処理することを問題とする。しかし、社会的費用は、所与の知識ではなく、環境全体の複雑な因果関係がいくつかの経験的観察と理論とから推論されるにつれて次第に明らかになっていくものであるため、それがあたかも手にとって見ることでできる一つの負の財であるかのように最初からモデルの中に組み込まれるのは間違いである。モデルが形式的なものになりがちなのは、科学が専門分化されていて、自分の専門でな

い領域の知識は所与とみなされていることに原因がある。また、専門家だけで知識が共有されていて、現地の人々が概念枠を有していなければ社会的費用は認識されない。社会的費用の問題解決には、概念と経験との分離を避けるために、異なる専門分野同士と一般の人々とは概念枠を共有し、共同で社会的費用の認識作業に当たることのできるような制度が必要である。

#### 参考文献

- ベルタランフィ、L. von., 長野敬訳 [1971] 『人間とロボット』みすず書房。  
——, 長野敬・太田邦昌訳 [1973] 『一般システム理論』みすず書房。  
ブルデュー、P., 今村仁司他訳 [1988] 『実践感覚1』みすず書房。  
——, 石崎晴己訳 [1991] 『構造と実践』藤原書店。  
——, 田原音和・水島和則訳 [1994] 『社会学者のメチエ』藤原書店。  
カッシーラー、E., 生松敬三・木田元訳 [1989-1997] 『シンボル形式の哲学』岩波文庫。  
——, 宮城音弥訳 [1997] 『人間』岩波文庫。  
ホワイトヘッド、A. N., 市井三郎訳 [1980] 『象徴作用』河出書房新社。  
カント、I., 篠田英雄訳 [1961-1962] 『純粹理性批判』岩波文庫。  
Kapp, K. W. [1961] *Toward a Science of Man in Society*, Hague, Martinus Nijhoff.  
—— [1963] *Social Costs of Business Enterprise*, 2nd ed., New York, Asia Publishing House.  
—— [1965] "Economic Development in a New Perspective: Existential Minima and Substantive Rationality," *Kyklos*, 18, No. 1, pp. 49-79.  
—— [1968] "In Defense of Institutional Economics," *Swedish Journal of Economics*, 70, No. 1, pp. 1-18.  
—— [1969] "On the Nature and Significance of Social Costs," *Kyklos*, 22, No. 2, pp. 334-347.  
—— [1970] "Environmental Disruption and Social Costs: A Challenge to Economics," *Kyklos*, 23, No. 4, pp. 833-848.  
—— [1985] *The Humanization of the Social Sciences*, New York, University Press of America. (柴田徳衛・斉藤興嗣訳『社会科学における総合と人間性』岩波書店, 1981年)。  
カップ、K. W., 篠原泰三訳 [1959] 『私的企業と社会的費用』岩波書店。  
——, 柴田徳衛・鈴木正俊訳 [1975] 『環境破壊と社会的費用』岩波書店。

- Knight, F. H. [1933] *Risk, Uncertainty and Profit*, New York, Kelly and Millman.  
—— [1935] *The Ethics of Competition and Other Essays*, London, Allen and Unwin.
- Mead, G. H. [1934] *Mind, Self, and Society*, Chicago, The University of Chicago Press. (稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973年)。  
宮本憲一 [1976]『社会資本論 [改訂版]』有斐閣ブックス。  
—— [1989]『環境経済学』岩波書店。
- パース, C., 浅輪幸夫訳 [1982]『偶然・愛・論理』三一書房。  
クワイン, W. V. O., 飯田隆訳 [1992]『経験主義の二つのドグマ』『論理的観点から』勁草書房。
- ラムゼイ, F. P., 伊藤邦武・橋本康二訳 [1996]『真理と確率』『ラムジー哲学論文集』勁草書房。
- 高橋正立 [1988]『生活世界の再生産』ミネルヴァ書房。  
—— [1993]『環境・環境問題・環境学』(高橋正立・石田紀郎編『環境学を学ぶ人のために』世界思想社)。
- 田中茂範・深谷昌弘 [1996]『コトバの〈意味づけ論〉』紀伊国屋書店。  
—— [1998]『〈意味づけ論〉の展開』紀伊国屋書店。
- 寺西俊一 [1978]「カップの「社会的費用」論をめぐる」『経済評論』一月号, 134-140ページ。  
—— [1981]「カップの社会的費用論に関する覚書」『一橋論叢』第86巻第5号, 139-146ページ。  
—— [1983]「公害・環境問題研究への一視角」『一橋論叢』第90巻第4号, 76-94ページ。  
—— [1984]「“社会的損失”問題と社会的費用論」『一橋論叢』第91巻第5号, 22-41ページ。
- 植田和弘 [1996]『環境経済学』岩波書店。